研究会「大規模シミュレーションと数理アルゴリズム」 2012年5ガス27-28日 東京大学工学部6号館

フェルミ多粒子系ダイナミクスの大規模計算

フェルミ粒子(分子・固体中の電子、原子核中の陽子・中性子)の運動、 密度汎関数理論を用いた光と物質の相互作用を記述する理論と計算

筑波大学数理物質科学研究科 計算科学研究センター

「ニーズ」と「シーズ」について

実験研究者	計算アプリ開発者 (理論物理屋)	数理アルゴリズム研究者
 (ニーズ) ・実験結果の解釈 ・理解の深化 ・新現象の予測 	 (シーズ) ・新しいモデルの提案 ・新規な計算法の開発、 測定結果の精密解析、 新たな解釈 ・新たな実験の提案 	
	 (ニーズ) ・速く正確な計算法 ・新たなモデルを可能にする -新規な計算アルゴリズム - 超並列計算機の活用法 これまでの、「みようみまね で、できる計算をする」文化 からの脱却 	 (シーズ) ・体系的な計算アルゴリズムの知識 ・新規な計算アルゴリズムの開発と応用 ・大規模計算機を活かした計算アルゴリズムの提案

私の作るアプリの分野: 光と物質の相互作用

伝統的な光科学

振動数のきまった光(電磁波)を用いて、 精密に測定する。

・分極率、振動子強度(原子・分子、原子核) 誘電関数(固体)

最近の光科学(の一分野)

・非常に短いパルス光を用い、時間領域で 測定する。

・強い光電場に対する物質の非線形応答 を利用して、光自身を制御する。



弱い光が引き起こす運動を、どのように記述するのか? まずはニュートンカ学(微小振動)で

つり合いの位置(基底状態)
$$\frac{\partial}{\partial x_i} V(x_1, x_2, \dots, x_N) = 0$$



つり合いの点の周りの微小振動

$$V(x_{1}, x_{2}, \dots, x_{N}) = V(x_{1}^{(0)}, x_{2}^{(0)}, \dots, x_{N}^{(0)}) + \frac{1}{2} \sum_{i,j} V_{ij} \eta_{i} \eta_{j}$$
$$m \ddot{\eta}_{i} = -\sum_{j} V_{ij} \eta_{j} \qquad V_{ij} = \frac{\partial^{2} V}{\partial x_{i} \partial x_{j}} \bigg|_{x_{i}^{(0)}}$$

微小振動を調べる3通りのアプローチ

対角化により基準モード を求める。

$$\eta_i(t) = Ca_i e^{-i\omega t}$$
$$\sum_j V_{ij} a_j = m\omega^2 a_i$$

固有值問題

一定振動数の電場 $E(t) = E_0 e^{-i\omega t}$ を加え、強制振動を調べる。 $m\ddot{\eta}_i = -\sum_j V_{ij}\eta_j + eE_0 e^{-i\omega t}$ $\eta_i(t) = a_i e^{-i\omega t}$ $m\omega^2 a_i - \sum_j V_{ij}a_j = eE_0$

線形代数方程式

パルス電場(撃力)を加え、 (減衰)振動を調べる。 $m\ddot{\eta}_i = -\sum_j V_{ij}\eta_j + I\delta(t)$ $\left(\dot{\eta}_i(0) = \frac{I}{m}\right)$

時間変数の微分方程式 (初期値問題)

密度汎関数理論(量子力学)



ニュートンカ学と密度汎関数法(量子力学)の対応関係



バネで結ばれた質点系

分子や固体の中の電子 原子核の中の陽子や中性子

エネルギーの最小化問題(基底状態)

基底状態=つりあいの位置 min $V(x_1, x_2, \cdots, x_N)$ min $E[\phi_i(\vec{r})]$ Nb × Nx 自由度 $\int d\vec{r} \phi_i^*(\vec{r}) \phi_j(\vec{r}) = \delta_{ij}$

基底状態の方程式(勾配ベクトルの構造) $\frac{\partial}{\partial x_i}V(x_1, x_2, \dots, x_N) = 0$ $\frac{\partial}{\partial x_i}V(x_1, x_2, \dots, x_N) = 0$ $\frac{\delta}{\delta \phi_i^*}E[\phi_i] = H\phi_i = \frac{\vec{p}^2}{2m}\phi_i + v[\rho(\vec{r})]\phi_i = \varepsilon_i\phi_i$ $\rho(\vec{r}) = \sum_i |\phi_i(\vec{r})|^2$ Kohn-Sham方程式

運動方程式

$$m_i \ddot{x}_i = -\frac{\partial}{\partial x_i} V(x_1, x_2, \cdots, x_N)$$

$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} \psi_i(\vec{r}, t) = \frac{\vec{p}^2}{2m} \psi_i(\vec{r}, t) + v[\rho(\vec{r}, t)] \psi_i(\vec{r}, t)$$
$$\rho(\vec{r}, t) = \sum_i |\psi_i(\vec{r}, t)|^2$$

時間依存Kohn-Sham方程式 6



$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} \psi_{k}(\vec{r},t) = H\psi_{k}(\vec{r},t) = \frac{\delta}{\delta\psi_{k}^{*}} E[\psi_{k}]$$

$$= \left\{ -\frac{\hbar^{2}}{2m} \vec{\nabla}^{2} + \int d\vec{r} \cdot \frac{\rho(\vec{r}\,)}{|\vec{r}-\vec{r}\,|} + V_{ion}(\vec{r}\,) + \mu_{xc}(\vec{r}\,) \right\} \psi_{k}(\vec{r},t)$$

$$\rho(\vec{r},t) = \sum_{k} |\psi_{k}(\vec{r},t)|^{2}$$
ポアソン方程式を解く

軌道関数
$$\psi_k(x, y, z)$$
 Nb (電子数÷2)×Nx (空間の格子点数) の成分を持つベクトル

$$H\psi_k(\vec{r},t) = \frac{\delta}{\delta\psi_k^*} E[\psi_k] \quad \text{勾配ベクトル計算(ハミルトニアンの演算)} \\ - 疎行列 × ベクトル \\ - ポアソン方程式を1回解くことが必要$$

計算時間: 多くの場合、この疎行列のベクトル演算がほとんど。 問題によっては、ポアソン方程式が律速に。

メモリ: 軌道関数が最大。

弱い光が引き起こす運動を、どのように記述するのか? まずはニュートンカ学(微小振動)で

つり合いの位置(基底状態)
$$\frac{\partial}{\partial x_i} V(x_1, x_2, \dots, x_N) = 0$$



つり合いの点の周りの微小振動

$$V(x_{1}, x_{2}, \dots, x_{N}) = V(x_{1}^{(0)}, x_{2}^{(0)}, \dots, x_{N}^{(0)}) + \frac{1}{2} \sum_{i,j} V_{ij} \eta_{i} \eta_{j}$$
$$m \ddot{\eta}_{i} = -\sum_{j} V_{ij} \eta_{j} \qquad V_{ij} = \frac{\partial^{2} V}{\partial x_{i} \partial x_{j}} \bigg|_{x_{i}^{(0)}}$$

微小振動を調べる3通りのアプローチ

対角化により基準モード を求める。

$$\eta_i(t) = Ca_i e^{-i\omega t}$$
$$\sum_j V_{ij} a_j = m\omega^2 a_i$$

固有值問題

一定振動数の電場 $E(t) = E_0 e^{-i\omega t}$ を加え、強制振動を調べる。 $m\ddot{\eta}_i = -\sum_j V_{ij}\eta_j + eE_0 e^{-i\omega t}$ $\eta_i(t) = a_i e^{-i\omega t}$ $m\omega^2 a_i - \sum_j V_{ij}a_j = eE_0$

線形代数方程式

パルス電場(撃力)を加え、 (減衰)振動を調べる。 $m\ddot{\eta}_i = -\sum_j V_{ij}\eta_j + I\delta(t)$ $\left(\dot{\eta}_i(0) = \frac{I}{m}\right)$

時間変数の微分方程式 (初期値問題)

時間依存Kohn-Sham方程式の直接計算

$$i\hbar\frac{\partial}{\partial t}\psi_{k}(\vec{r},t) = H\psi_{k}(\vec{r},t) = \left\{-\frac{\hbar^{2}}{2m}\vec{\nabla}^{2}\int d\vec{r} \cdot \frac{\rho(\vec{r}',t)}{|\vec{r}-\vec{r}'|} + V_{ion}(\vec{r}) + \mu_{xc}(\vec{r},t)\right\}\psi_{k}(\vec{r},t)$$
$$\rho(\vec{r},t) = \sum_{k}\left|\psi_{k}(\vec{r},t)\right|^{2}$$

陽解法のアルゴリズム: Taylor展開法

$$\psi(t + \Delta t) = \exp\left[\frac{H\Delta t}{i\hbar}\right]\psi(t) \approx \sum_{k=0}^{N} \frac{1}{k!} \left(\frac{H\Delta t}{i\hbar}\right)^{k} \psi(t)$$

3次以上の場合、時間刻みを適当にとれば、安定な時間発展が可能に。

各時間ステップで、疎行列(ハミルトニアン)演算を4回程度必要 M × Nx × Nb 必要となるメモリは、軌道関数分だけ Nx × Nb × 16byte

各時間ステップで、ポアソン方程式を解くことも必要 ただし、前ステップの結果を初期条件にすると、共役勾配法を用いて短時間に収束



 $V_{ext}(\vec{r},t) \propto \delta(t) z$







私の作るアプリの分野: 光と物質の相互作用

伝統的な光科学

振動数のきまった光(電磁波)と物質の 相互作用を用いて、精密に測定する。 ・分極率、振動子強度(原子・分子、原子核) 誘電関数(固体)

最近の光科学(の一分野)

非常に短いパルス光を用い、実時間計測。 強い光による物質の非線形応答を利用し て、光自身を制御する。



たたいても、うまくいかない場合も





i∈proton

 $V \propto \delta(t) \sum \left(2z_i^2 - x_i^2 - y_i^2\right)$

Nuclear force

原子核の場合、叩くと重心が移動したり回転してしまう場合がある。 (重心が動いてしまうと、微小振動にならない) 方程式を線形化して、強制振動(線形方程式)・固有値問題として解く。

時間依存Kohn-Sham方程式の線形化

外場と微小振動解を次の形に置く。

 $\delta \psi_i(\vec{r},t) = X_i(\vec{r})e^{i\omega t} + Y_i(\vec{r})e^{-i\omega t} \qquad V_{ext}(\vec{r},t) = V_{ext}(\vec{r})e^{-i\omega t}$

修正Sternheimer方程式(線形方程式)

$$\begin{bmatrix} -\hbar\omega + (h_{KS} - \varepsilon_{i})]\delta_{ij} + \phi_{i}\frac{1}{|\vec{r} - \vec{r}'|}\phi_{j}^{*} + f_{xc} & \phi_{i}\frac{1}{|\vec{r} - \vec{r}'|}\phi_{j}^{*} + f_{xc} \\ \phi_{i}^{*}\frac{1}{|\vec{r} - \vec{r}'|}\phi_{j}^{*} + f_{xc} & [\hbar\omega + (h_{KS} - \varepsilon_{i})]\delta_{ij} + \phi_{i}^{*}\frac{1}{|\vec{r} - \vec{r}'|}\phi_{j} + f_{xc} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} X_{j}(\vec{r}) \\ Y_{j}(\vec{r}) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} V_{ext}(\vec{r})\phi_{i}(\vec{r}) \\ V_{ext}(\vec{r})\phi_{i}(\vec{r}) \end{bmatrix}$$

 $V_{ext}(\vec{r})=0$ と置けば、固有値 ω に対する一般化固有値問題

- ・疎行列問題だが、行列・ベクトル積演算に2回のポアソン方程式を含む。
- ·次元は、軌道Nb×空間格子点Nx×2。
- ・線形方程式は、さまざまな光の振動数(シフト)に対して解くことが必要。
- ・光の振動数(シフト)に虚数を加える必要。

線形方程式 vs 対角化 (原子核の光応答計算)

Inakura (RIKEN)

各ω毎に線形一次方程式を 解いた結果(黒丸)と、 対角化の結果(縦線)を滑ら かにした結果(実線)は一致する。

$$\begin{bmatrix} -\hbar\omega + (h_{KS} - \varepsilon_i) \end{bmatrix} \delta_{ij} + \phi_i \frac{\delta h_{KS}}{\delta n} \phi_j^* \qquad \phi_i \frac{\delta h_{KS}}{\delta n} \phi_j \\ \phi_i^* \frac{\delta h_{KS}}{\delta n} \phi_j^* \qquad [\hbar\omega + (h_{KS} - \varepsilon_i)] \delta_{ij} + \phi_i^* \frac{\delta h_{KS}}{\delta n} \phi_j \end{bmatrix} \begin{bmatrix} X_j(\vec{r}) \\ Y_j(\vec{r}) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} V_{ext}(\vec{r}) \phi_i(\vec{r}) \\ V_{ext}(\vec{r}) \phi_i(\vec{r}) \end{bmatrix}$$





原子核の場合の線形計算 ソルバ毎の収束性

T. Inakura, T. Nakatsukasa, K. Yabana, Phys. Rev. C80, 044301 (2009)

 $\omega X_i(\xi, \omega) = [h_0(\xi) - \epsilon_i] X_i(\xi, \omega)$ $+ \hat{P} \{ V_{\text{ext}}(\xi, \omega) + \delta h(\xi, \omega) \} \phi_i(\xi),$ $-\omega Y_i^*(\xi, \omega) = [(h_0(\xi) - \epsilon_i) Y_i(\xi, \omega)$ $+ \hat{P} \{ V_{\text{ext}}^{\dagger}(\vec{\xi}, \omega) + \delta h^{\dagger}(\xi, \omega) \} \phi_i(\xi)]^*$

16

現在のところ、GCR、GPBiCG-ARのみが 全てのエネルギー領域で収束。

シフトに関して独立に(並列)計算。



シフト法の検討 (篠原、矢花・二村、櫻井)

まずは、素性の良い分子(電子の光応答)の場合から。

修正Sternheimer方程式(線形方程式)

$$\begin{bmatrix} \left[-\hbar\omega + (h_{KS} - \varepsilon_i)\right]\delta_{ij} + \phi_i \frac{1}{|\vec{r} - \vec{r}'|}\phi_j^* + f_{xc} & \phi_i \frac{1}{|\vec{r} - \vec{r}'|}\phi_j + f_{xc} \\ \phi_i^* \frac{1}{|\vec{r} - \vec{r}'|}\phi_j^* + f_{xc} & \left[\hbar\omega + (h_{KS} - \varepsilon_i)\right]\delta_{ij} + \phi_i^* \frac{1}{|\vec{r} - \vec{r}'|}\phi_j + f_{xc} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} X_j(\vec{r}) \\ Y_j(\vec{r}) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} V_{ext}(\vec{r})\phi_i(\vec{r}) \\ V_{ext}(\vec{r})\phi_i(\vec{r}) \end{bmatrix}$$

解法による計算サイズの比較

Nx: 実空間格子点、Nb: 電子軌道 Nω: 振動数の分点、Nε: 固有値の数、Nt: 時間発展の回数、Niter: 反復回数

	計算コスト	メモリ
対角化	Nε × Nx × Nb × Niter +(Gram-Schmidt)	$N\varepsilon \times Nx \times NB$
線形方程式	$N\omega \times Nx \times Nb \times Niter$	$N\omega \times Nx \times Nb$
実時間発展法	Nt \times Nx \times Nb Nt \sim 50000	Nx×Nb
連分数展開法	$Nx \times Nb \times Niter$	Nx×Nb
シフト線型方程式の Krylov部分空間法	$1 \times Nx \times Nb \times Niter$	$N\omega \times Nx \times Nb$
		1 (スカラー化) 18

この他に、ポアソン方程式(空間格子点Nx)を 各ステップで1-2回解くことが全ての方法で必要。

シフト法を用いた場合の残差分布





シフト法とスカラー化で、実時間計算と線形方程式の必要とする計算資源は同程度に見えるが、実際の計算ではポアソン方程式が律速となる場合がある。

$$i\hbar\frac{\partial}{\partial t}\psi_{k}(\vec{r},t) = H\psi_{k}(\vec{r},t) = \left\{-\frac{\hbar^{2}}{2m}\vec{\nabla}^{2}\int d\vec{r} \cdot \frac{\rho(\vec{r},t)}{|\vec{r}-\vec{r}'|} + V_{ion}(\vec{r}) + \mu_{xc}(\vec{r},t)\right\}\psi_{k}(\vec{r},t)$$
$$\rho(\vec{r},t) = \sum_{k}|\psi_{k}(\vec{r},t)|^{2}$$

実時間計算では、前回の解を初期値に 計算すれば直ちに収束する。

$$\int d\vec{r}' \frac{1}{\left|\vec{r}-\vec{r}'\right|} \sum_{k} \phi_{k}(\vec{r}') X_{k}(\vec{r}')$$

線形方程式計算では、Iterationの度に 異なるベクトル $X_k(\vec{r})$ が入るため、 毎回収束が遅い。

私の作るアプリの分野: 光と物質の相互作用

伝統的な光科学

振動数のきまった光(電磁波)と物質の 相互作用を用いて、精密に測定する。 ・分極率、振動子強度(原子・分子、原子核) ・誘電関数(固体)

最近の光科学(の一分野)

非常に短いパルス光を用い、実時間計測。 強い光による物質の非線形応答を利用し て、光自身を制御する。



高強度な光を用いた物質の加工・新しい光通信の試み

最初のプロセスは、強い光電場による物質のプラズマ化



conduction band. c, Microscope images showing the large variation in the feature characteristics depending on the experimental conditions. Left: single 10-nJ pulse and right: 25,000 5-nJ pulses at a frequency of 25 MHz (both with the same focal spot).

Micromachining – waveguide-



Optical microscope image of waveguides written inside bulk glass by a 25-MHz train of 5-nJ sub-100-fs pulses, C.B. Schaffer et.al, OPTICS LETTERS 26, 93 (2001)

Nanosurgery



Ablation of a single mitochondrion in a living cell. N. Shen et.al, Mech. Chem. Biosystems, 2, 17 (2005). 光と物質の非線形な相互作用をどうやって記述するか?

弱い光の場合: 電磁気学と量子力学の棲み分け $D = \varepsilon(\omega)E$

物質中の光伝播は電磁気学で記述する(マクスウェルの方程式)

例えば、FDTD法 時間・空間変数を差分化して解く 与えられた光に対する電子の応答を 量子力学で記述する (時間に依存するシュレディンガー方程式)

時間依存Kohn-Sham方程式 GW近似(多体摂動論)

高強度な光では、誘電率を用いた記述は役に立たない。



超並列計算機を用いて、2つの階層を連結する試み

「マクスウェル+時間依存密度汎関数理論による マルチスケール・シミュレーション」

電磁場の2次元的な伝播 (μm スケール)





$$i\hbar\frac{\partial}{\partial t}\psi_{i}(\vec{r}.t) = \left\{\frac{1}{2m}\left(-i\hbar\vec{\nabla} + \frac{e}{c}\vec{A}(t)\right)^{2} - e\phi(\vec{r},t) + \frac{\delta E_{xc}}{\delta n}\right\}\psi_{i}(\vec{r},t)$$
$$\vec{j}(\vec{r},t) = \frac{\hbar}{2mi}\sum_{i}\left(\psi_{i}^{*}\vec{\nabla}\psi_{i} - \psi_{i}\vec{\nabla}\psi_{i}^{*}\right) - \frac{e}{4\pi c}n\vec{A}$$

電磁波と電子のダイナミクスを、マルチスケールグリッドで連結





各巨視的格子点に(複数の)計算ノードを配置、ノード間通信は、高々数十バイト



電磁場(ベクトルポテ ンシャル)の時間発展 は、隣接ノード間で 情報を交換。

各ノードでは、独立に 電子ダイナミクスの時 間発展を計算 26

マルチスケール計算の例: 弱い光パルス (電磁場と電子ダイナミクスが分離する場合) 1024コア、10時間程度



方程式が「解けている」ことの確認 保存量が保存されていること(エネルギー保存)で十分?

 $L[\psi,\phi,A] = \int dZ \left[\sum_{i} \int_{\Omega(Z)} d\vec{r} \psi_{i,Z}^*(\vec{r},t) i\hbar \frac{\partial}{\partial t} \psi_{i,Z}(\vec{r},t) \right]$ $-\frac{1}{2m}\left|\left(-i\hbar\vec{\nabla}_r + \frac{e}{c}\vec{A}_Z(t)\right)\psi_{i,Z}(\vec{r},t)\right|^2$ $+ \int_{\Omega(Z)} d\vec{r} \Big\{ e \Big(n_{ion,Z}(\vec{r}) - n_{e,Z}(\vec{r},t) \Big) \phi_Z(\vec{r},t) - E_{xc}[n_Z(\vec{r},t)] \Big\}$ $+\int_{\Omega(Z)} d\vec{r} \frac{1}{8\pi} (\vec{\nabla}_r \phi_Z(\vec{r},t))^2 + \frac{\Omega}{8\pi c^2} \left(\frac{\partial^2 \vec{A}_Z(t)}{\partial t^2} \right)^2 + \frac{\Omega}{8\pi} \left(\vec{\nabla}_Z \times \vec{A}_Z(t) \right)^2 \right]$ $H = \int dZ \left| \sum_{i} \int_{\Omega(z)} \frac{1}{2m} \left| \left(-i\hbar \vec{\nabla}_r + \frac{e}{c} \vec{A}_Z(t) \right) \psi_{i,Z}(\vec{r},t) \right|^2 \right|^2$ $+ \int_{\Omega(Z)} d\vec{r} \left\{ \frac{e}{2} (n_{ion} - n_{e,Z}(\vec{r},t)) \phi_Z(\vec{r},t) + E_{xc} [n_Z(\vec{r},t)] \right\}$ $+\frac{\Omega}{8\pi c^2} \left(\frac{\partial \vec{A}_Z(t)}{\partial t}\right)^2 + \frac{\Omega}{8\pi} \left(\vec{\nabla}_Z \times \vec{A}_Z(t)\right)^2$

マルチスケール方程式を 与えるラグランジアンから ハミルトニアン(保存する エネルギー)を導くことが できる。

差分化の扱いで、エネルギー保存に敏感な部分

(t)

do

$$A_{Z}(t + \Delta t) = 2A_{Z}(t) - 2A_{Z}(t - \Delta t)$$

$$+ \frac{c^{2}\Delta t^{2}}{\Delta Z^{2}} \{A_{Z+\Delta Z}(t) - 2A_{Z}(t) + A_{Z-\Delta Z}(t)\} + 4\pi c\Delta t J_{Z}$$

$$\psi_{k,Z}(\vec{r}, t + \Delta t) = e^{-iH_{Z}(t)\Delta t}\psi_{k,Z}(\vec{r}, t)$$

$$J_{Z}(t + \Delta t) \leftarrow \psi_{k,Z}(t + \Delta t), A_{Z}(t + \Delta t)$$
end do

軌道関数の時間発展に、どの時刻の ハミルトニアンを用いるか?

 $H_{Z}[A_{Z}(t),\rho_{Z}(\vec{r},t)]$

電磁場のエネルギーの時間変化 $I = 10^{10} W/cm^2$ 6e-006 5e-006 4e-006 $E^{2}+B^{2}$ 3e-006 2e-006 1e-006 ٥ 5000 10000 15000 20000 0 25000 time [a.u.]

FDTD (ϵ =constant) $\hat{h}[A(t), \rho(t)]$ $\hat{h}\left[\frac{A(t) + A(t + \Delta t)}{2}, \rho(t)\right]$ さまざまな強度の光に対して、電磁場と電子のエネルギーの和は良い精度で保存している。



- - 電磁場のエネルギー

電子の励起エネルギー



まとめ

(時間依存)密度汎関数理論

- フェルミ多粒子系の量子ダイナミクスを記述するアプローチ
- 実空間3D格子を用いた軌道関数の表現 ⇒ 超並列計算に便利

伝統的な光応答(一定振動数の弱い光電場に対する物質の応答)

- 実時間計算、線形方程式、固有値解法を実装
- 実時間計算は、実行可能であれば全スペクトルを求めるのに有効
- シフト法により、線形方程式と実空間法は、同程度の計算コストに 原子核の問題では、使えるソルバが限られている。
 - ポアソン方程式の負荷が線形方程式では律速となる場合も。

高強度な光と物質(固体)の相互作用

- 電磁気学と量子力学を融合したマルチスケール・アプローチ。
- 超並列計算機の進展により可能に。
 - ノード間の通信量が少なく、大規模並列向き。
- 1次元の光伝播で1000-10000コアが必須 2次元(斜入射、p偏光、自己収束、・・・)では100,000コア以上
- 「解けている」ことの確認?
- なるべく少ない格子での計算。動的格子生成(動的ノード生成)?